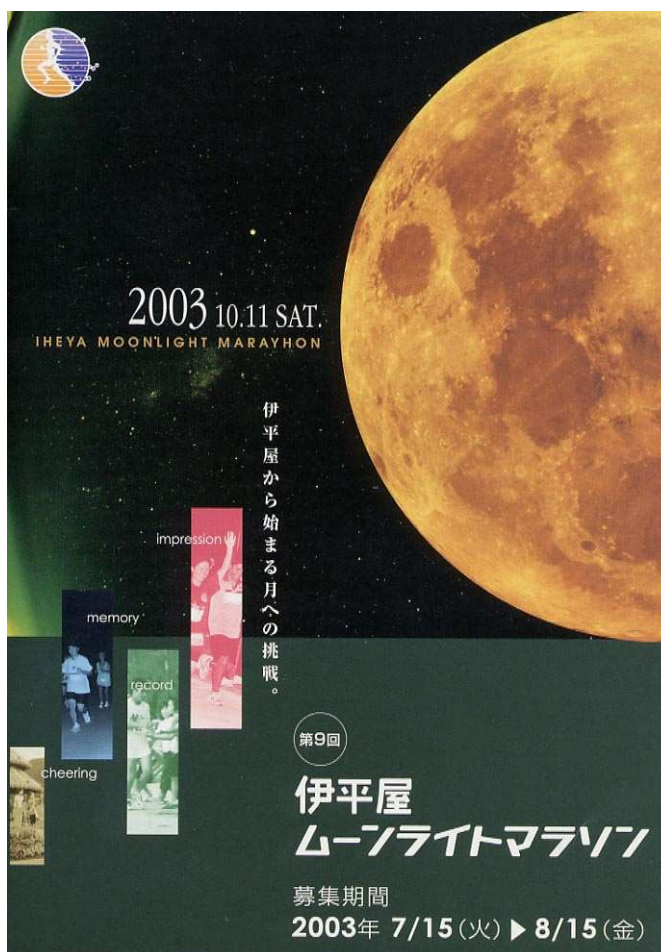


「伊平屋ムーンライトマラソン」

企画までの経緯

沖縄本島の北東に位置する伊平屋島は、本島の北部にある運天港から1日に1便しかフェリーが通っていない、本当の離島です。そのため、東京からは1日では伊平屋島へは行くことが出来ません。ですから、日本中がバブルで浮かれていた時代でも、何の影響もありませんでした。住民は約1200名、主な職業は漁業と農業、と言ってもその規模は小さく、産業と言えるほどではありません。公共工事もっとも大きな仕事かも知れません。高校は無く、中学を卒業するとほとんどは本島の高校に行き、そのまま本島に就職してしまいます。

春から秋にかけて、海水浴やキャンプ、釣り、ダイビングの人達が本島から来る程度で、小さな旅館が4軒あるだけでした。1994年、そのような島の役場で働く経済企画課の方から、知り合いを通じて何か島を元気づけることをやりたいので企画を出して欲しいとの依頼がありました。



企画立案作業

まずは現地を見てみなくては何も分りませんから、那覇から半日ばかりでフェリーに揺られて現地調査に出かけました。自然は手付かずで、本当に素晴らしい島でした。

周囲は海に囲まれ、水はきれい、空気もきれい、月や星もきれいでした。

こんなに素晴らしい自然と景色を持った、こんな不便な場所に沖縄本島を始め、本土から多くの人を呼ぶには、この伊平屋でしか体験できないイベントを開催しなければなりません。

日本人が最も好きなイベントのひとつに「マラソン」があります。1年間に国内だけで大小合わせて約2000大会、自治体数が約3000ですから、66%の自治体が開催していると言っていいほど人気があります。

沖縄の離島でもいくつもマラソン大会を開催しています。いまさら、普通のマラソンをしたってこんな不便でお金の掛かる場所に走りには来ないでしょう。

それならば、日本でも、世界でもやっていない、そして、伊平屋の自然を活かした大会を創ろうと言うことで、「伊平屋ムーンライトマラソン」を提案したのです。

大会企画主旨

当時の、企画提案書に次のように書いた覚えがあります。

大会は10月の満月に最も近い土曜日にします。
出発は夕方の5時、島のほぼ中央、東海岸にある役場横の運動公園から海沿いの道を北上します。選手は走りながら珊瑚礁に打ち寄せる波を見、潮騒の音を聞くことができます。
40～50分で北端の岬を回り西海岸へ。
夕陽が水平線の彼方、東シナ海へ沈んでいくのを見ながら、海沿いの道を走ります。
辺りが暗くなるとともに無数の星が輝き始めます。そして、やがて満月が海を照らしながら上がって来ます。選手は、空の月と星のひかりを見ながら、そして海に輝く月のひかりを見ながら、オゾン
を胸一杯に吸って走るのです。
街灯も無い島では、すべてが一体になります。
南端の30キロ地点を過ぎ、起伏のあるコースが疲れた身体に更に重くのしかかって来ます。35キロ地点の高台に来ると、暗闇の中にぼんやりとまるで天国が光りの中に浮かんでいるように見えるのが、ゴールの運動公園です。
選手はここで再び元気を回復します。

こんな大会なら自分でも走ってみたい、そんな想いを胸にプレゼンテーションをしました。

その後の経過

第1回大会は、本当にこんなイベントで人がやって来るのかという疑心暗鬼で、色々な組合や他の団体の人達もあまり協力的ではありませんでした。それに、宿泊施設が旅館、民宿合わせて200名がやっと、という状況ですから、仕方が無いといえば仕方ありません。しかし、2回、3回と続けるうちに島中の人々が1年に一度のお祭りという意識が生まれてきたのです。

参加者を歓迎する為に小学生のマーチングバンドが出来、港でフェリーから降りて来る選手達を可愛い子供マーチングバンドが迎えます。また、前夜祭では、地元の主婦達が廃れていた琉球舞踊を復活させて踊ったり、男性達が琉球太鼓隊を作ったりと、伝統文化活動が活発になりました。また、コース沿いに太陽光発電の街路灯等を整備したりとか、あらゆる面で島が動き始めたのです。

それは大会中にも同じことがいえます。真っ暗な道を選手が走っていると、突然暗闇から鍋をガンガン叩いて、おじい、おばあ、が応援してくれるのです。そして懐中電灯で足元を照らしてくれるのです。こんな大会を経験してしまったら選手はやみつきになり、翌年は友達を誘って参加します。

参加者も100名単位で増え続け、旅館や民宿だけでは対応しきれず、一般の家庭や体育館にも宿泊できるようにして、対応するようになりました。

そして、この数年は募集人員500名に対して1500名近くの応募が来るようになり、参加することが難しい人気大会に成長しました。

感想

イベントを提案する時にいつも主催者に申し上げることがあります。

「イベントを開催する以上、参加者に喜んでいただく為にあらゆる努力をすることはもちろん必要ですが、それを支えるスタッフやそこに住む人達も同じように楽しまなければ、そのイベントは長続きしません。なぜなら、スタッフが楽しくなく笑顔がないイベントは、参加者も楽しくないからです。遠くから来た人達が地元の人達に不親切にされたら、楽しくないからです。上から言われたからやる、とか、お金が出るからやる、というのでは、1年か2年はいいかも知れませんが、それ以上続きません。」
伊平屋のマラソンはまさにそれを裏付けるかのようなイベントとなりました。